

『もうひとつの『天地明察』』

会津暦、 日月星の 系譜



大人の知的好奇心を満たす旅をしよう。
土地の人と、もともと深く触れ合う旅をしよう。
地元発信型が話題の旅行ブランド「旅市」から
新しく生まれた「旅市エスコート」。
「大人の休日倶楽部」会員の皆さまにおくる
添乗員付き、安心、ゆとりのおとな旅。



今年5月、多くの人々が空を見上げた。932年ぶりに日本列島の広い範囲で観測された金星環日食。太陽と月の神秘的なシヨールに日本中が酔いしれた。6月には今世紀最後の金星の太陽面通過。8月は金星が月に隠れる金星食と、今年は大天体観測のゴールデンイヤード。江戸時代前期、そこにも空を見上げ、天と地の定石をつかむことに生涯をかけた男がいた。安井算哲(後の洪川春海)。平安時代から800年以上にわたって使用されてきた宣明暦の誤りを見抜き、日本独自の暦を生み出した。その生き様を描いた沖方丁の小説『天地明察』(角川書店)が映画化され、今秋待望の公開となる。



多くの優秀な人材を輩出した講校、日新館。復元された建物では当時の授業風景を再現
牧原ゆみ子=取材・文 長崎昌夫=撮影

会津を訪ねる、暦の歴史。 藩祖保科正之が遺した 天と地の約束ごと。 今宵、会津の空を仰ぐ。

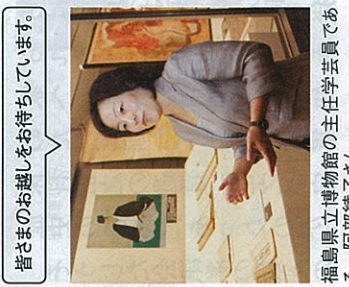


映画『天地明察』の中に登場する渾天儀。これで天体の位置を測定した



日新館のただ一つの遺構である天文台跡。ここでは星の観測のほか、冬至の日には諏方神社の歴史や天文方節範などが集まり、来年の気候を予測して藩に提出したという。※写真はイメージです(加工しています)

当時、暦を司ることは、国を司ること。改暦は幕府にとっての一大国家プロジェクトだった。江戸幕府に基の打ち手として仕えていた安井算哲を、改暦のリトターに推挙し支援したのが会津藩初代藩主、保科正之。四代将軍家綱の補佐役として江戸幕府を主導し、藩政にも力を注いだ名君だ。彼は人々の生活に密



皆さまのお越しをお待ちしています。
福島県立博物館の主任学芸員である、阿部綾子さん

着した暦の重要性を十分認識していたと考えられる。「実は正之公が入封する以前から、会津は暦とゆかりの深い土地でした」と語るのは福島県立博物館学芸員の阿部綾子さん。「会津暦は東北地方では最も古い暦とされ、永享年間(1429~1441)、会津若松の諏方神社で作成された」と記録があります。貞享元(1684)年、安井算哲が作成した貞享暦が採用され、以後、幕府天文方が暦を統一。出版の権利も会津三島、江戸、京、奈良、伊勢など数カ所に限定した。「会津暦の特徴は、独特の綴り方や印刷技術の高さ。東北一円から北関東で使われ、江戸でもその名が知られるほど、会津地方の名産品でもありました」



狩野探幽によって描かれた保科正之の肖像画(土津神社蔵)。今も正之に理器の政治家像を見る人が多い

右/日新館に設けられた水練場。日本初のプールといわれ、向井流という泳法を学んだ。甲冑を着けて泳ぐ実戦的な練習も行われた
左/背景に磐梯山、会津盆地を望む眺めのいい高台に復元された日新館。建物の方位もかつてのまま。写真は、堂々たる構えの南門

